

24歳 『報知新聞』入社
30歳 『家庭之友』創刊
48歳 自由学園創立
54歳 「全国友の会」発足

vol. 13

羽仁もと子

▶▶ Hani Motoko

家庭生活の向上に尽力した 女性教育家・ジャーナリスト の草分け的存在

▶▶▶ 校正者から記者、編集者へ

女性では教育家としてもジャーナリストとしても日本における草分け的存在である羽仁もと子は、1873年（明治6年）青森県八戸市に生まれた。幼少期から表彰されるほど成績優秀だったこともあり、早くから上京する意思を固めていた。16歳になると早速東京の高等女学校に入学し、在学中には生涯の精神的支柱となるキリスト教の洗礼を受けている。さらに18歳で私立の女学校へ入学すると、学費のため同校の雑誌の校正を手伝った。

卒業後、一旦は故郷へ帰り教師となるが、結婚して京都へ移住した後、半年で離婚した。新聞社で職を得ようと応募するも、「女性の応募は受け付けない」と断られる。食いが下がって試験を受け、『報知新聞』の校正係に採用された。24歳の時である。やがて記者としても活動するようになり、孤児院のルポなどで反響を呼んだ。

30歳で長女を出産した頃、再婚相手である羽仁吉一と共に、勤務先を版元に現在の『婦人之友』の前身である『家庭之友』を創刊した。家庭生活上の問題や疑問に焦点を当てた同誌は、多くの支持を獲得する。翌年『羽仁もと子家計簿』を考案すると、ベストセラーとなった。この家計簿は発行から100年以上が経った現在でも毎年出版されている。順調に読者数を増やしていった羽仁夫婦は、その後、版元から独立し、婦人之友社を設立した。

▶▶▶ 「家庭」から世の中を変える

女性や子どもへの啓蒙活動に取り組みつつ、2人の子



1873年青森県八戸市生まれ。教育家。ジャーナリスト。『報知新聞』記者を経て、夫・吉一と共に『家庭之友』の創刊や自由学園の創立、「全国友の会」発足に携わる。夫婦二人三脚で日本人の家庭生活の向上に尽力した。

どもを育てる日々の中、機械的に知識を詰め込むだけの当時の教育に危機感を覚えるようになった羽仁夫婦は、1921年（大正10年）に自由学園を創立する。キリスト教精神に基づいた自由を重んじ、生徒の自労自治を基礎とするこの学び舎は、現在は幼稚園から大学までの一貫教育を行う規模にまで成長している。

一方この前後から『婦人之友』の愛読者たちから成る組織の形成にも力を入れるようになり、54歳で「全国友の会」を発足させる。家事、子どもの教育、健康など家庭生活にかかわる事柄の充実向上をはかり、ひいては社会に広く女性の力を及ぼしていくことを目指す同会もまた、1万人以上の会員数で現在まで続いている。

59歳の時にはフランスで開催された世界新教育会議に出席し、そのままヨーロッパ諸国・アメリカを歴訪。戦時中は物資不足から困窮する人々の生活を守るため、生活合理化運動の指導に当たる。戦後しばらくして公私共にパートナーだった夫・吉一が急逝すると、まるであとを追うように1957年（昭和32年）に83歳で生涯を閉じた。

「家庭」に焦点を当てたもと子の業績は、草の根レベルでの内側からの働きかけが中心で、一見すると地道すぎるのかもしれない。だが、それまで「公」の部分ばかりを注視してきた日本人に、「家庭」の重要性を認識させた彼女の功績は大きいのではないだろうか。彼女の提唱した「思想しつつ、生活しつつ、祈りつつ」の理念は、私たちが想像している以上に現代社会へ影響を与え続けているのかもしれない。

（執筆／ライター 青山 繁樹）